

定期市における来場者の発話と対話の特徴についての研究 — 中心市街地におけるにぎわいの再生に向けて —

A Study on Characteristics of Utterances and Dialogues of Visitors in Monthly Markets - Toward the Recovery of the Spatial Liveliness at the Town Centers -

河合克俊*・村上修一**

Katsutoshi KAWAI *・Shuichi MURAKAMI**

Abstract : The objective of this study is to clarify the characteristics of the utterances and the dialogues of those who visit the monthly market on the pedestrian deck, in order to gaining feedbacks for how to create the spatial liveliness. The activities of the 176 visitors of the market held in the downtown of the Otsu, Shiga prefecture, were observed. The results are as follows. 1) 72 visitors talked to the merchants. 87 cases among such 222 utterances developed into the conversations. 2) Questions about merchandise tended to develop into the conversations. 3) The cases of the utterances and the dialogues increased when the visitors either stayed at the market place more than 10 minutes or walked around the whole place. 4) The visitors' actions to the goods and the merchants as well as the merchants' actions to the visitors were observed and thought to be the triggers of the utterances just after them. Finally, several problems and suggestions for increasing more opportunities of the conversations in the market place were considered.

Keywords: Urban Revitalization, Downtown, Activation, Temporary Space, Morning Market

都市再生、中心市街地、活性化、仮設空間、朝市

1. 背景

近年の都市再生の取り組みにおいて、「にぎわい」が創出の目標としてよく掲げられる⁽¹⁾。辞書によれば、人や物がたくさん出そろって活気があることである⁽¹⁾。より具体的な表現として「にぎやかさ」があり、人や物がその場所に集中してあられ活気のある様子、という意味とともに、人声や物音が盛んに聞こえる様子という意味もある⁽²⁾。つまり、都市空間のにぎわいを人の視点から検証する際には、人の多さに加えて、発話や対話⁽²⁾といった人声も指標の1つとなるのではないだろうか。

にぎわいの空間を創出するために、人の流れをできるだけ多く呼び込むためのゾーニング、施設配置、動線計画など様々な都市デザインが実践されてきた。また、その効果を検証するために、都市空間における人の行動に着目する研究が行われてきた。今井ら (1999年) は公共空間における行動と空間の関係について⁽³⁾、坂井ら (2001年) は広場における歩行者と滞留行動の関係について⁽⁴⁾、篠崎 (2002年) は公開空地における滞留行動相互の関係について⁽⁵⁾、それぞれ一定の知見を得た。これらの研究に共通するのは、より多くの人、より長い時間、より多様な行動をとるかどうかににぎわいの指標とする点である。しかし、前述のような発話や対話にまでおよぶものではない。

一方、にぎわいを特定の時空間に創出するものとして、イベント、パフォーマンス、定期市といった仮設空間がある。特に、売り買いを前提とする定期市は、商品を媒体とする掛け声や交渉など、知人以外との発話や対話が伴う時空間として注目される。定期市には、縁日市、日曜日、朝市、夕市、古市、街路市など様々なものがあり、かつての都市では街路や社寺境内で数多くの定期市がたっていた⁽⁶⁾。定期市についてはこれまで、折田ら (1995年) が、定期市

の評価や効果についての既往研究をふまえた上で、地域に継承される定期市を地域振興策として発展させるための問題を網羅する研究を行った⁽⁷⁾。また、朝倉ら (1998年) は、神社における定期市を対象に、露店の空間把握と客の行動調査より、敷地空間と仮設空間との対応関係を明らかにした⁽⁸⁾。特に後者は、特定の時空間におけるにぎわい創出に関連する研究として、空間と行動の双方を調査した点に注目したい。ただし両者とも発話や対話を対象としていない。

近年、地産地消の見直しや健康志向などから、生産者の直販による定期市が新設されることがある。その中には、売買による収益だけでなく、コミュニケーションを目的とするものもある⁽⁹⁾。コミュニケーションの前提は、売り手と買い手の対話、およびそのきっかけとなる発話である。定期市における発話と対話を検証することで、新たな観点から、にぎわい創出に向けた知見を得るのではないかと。

2. 目的

以上を背景とし、定期市における来場者の行動について、発話と対話を中心に観察し、その特徴を明らかにすることが、本研究の目的である。対話のきっかけとして、他者に対する発話に注目し、諸要因との関係について分析を行う。また、発話の対象者との間に言葉のやりとりが続く対話に注目し、きっかけとなる発話の内容等、対話への移行の要因を探る。これらを明らかにすることで、定期市における発話や対話の誘発のための知見を得ることができる。その知見を今後のにぎわい空間創出にいかせることが本研究の意義である。そのため、にぎわい創出を目的に市民グループが始めた試みを研究対象とし、同様の試みに対する知見の応用性を担保する。

* 正会員 阿久津友嗣事務所 Tomotsugu Akutsu Architects

** 正会員 滋賀県立大学環境科学部 School of Environmental Science, University of Shiga Prefecture

3. 方法

(1) 調査対象の概要

対象とする定期市は、2003年より毎月第3日曜日に滋賀県大津市の浜大津地区で開催されている「浜大津こだわり市場」⁽⁴⁾である。NPO法人をコアとする運営委員会により行われている。県内の生産者が直接出店して対面販売することを基本とし、野菜、漬物、茶、パンなどの食材・食品や、木工品、下駄などの手しごと品を扱う店がある。出店者はほぼ固定である。

当定期市は、私鉄駅と再開発ビル⁽⁵⁾を空中で結ぶ歩行者道路上で行われている(図-1)。歩道橋をはさんで会場が分かかれ、駅側(会場A)には食材・食品の18店が、ビル側(会場B)には手しごと品の7店が並ぶ。両方とも屋外であるが常設の屋根がある。会場Aは、駅および再開発ビルと周辺の駐車場、琵琶湖岸の商業施設、港をつなぐデッキ状の空間で、中央は地上のバスターミナルまで吹抜となっており、エレベータおよび階段で下りることができる。会場Bは、再開発ビルの中央を貫通するモール状の空間であり、駅の反対側で住宅街の緑道に接続している。会場Aは午前8時から午後0時まで、会場Bは午前10時から午後4時までと、出店時間帯にずれがある。なお、運営者は開催のたびに、道路管理者の大津市より道路占用許可を、また所管の警察署より道路使用許可を受けている。

各会場の平面図に出店配置を示す(図2)。1店に割り当

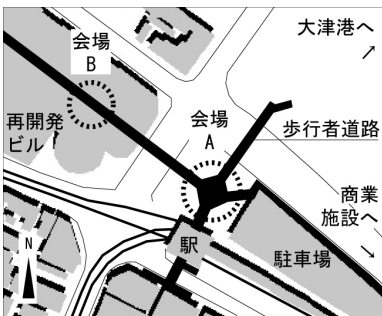


図-1. 定期市の会場および周辺の地図

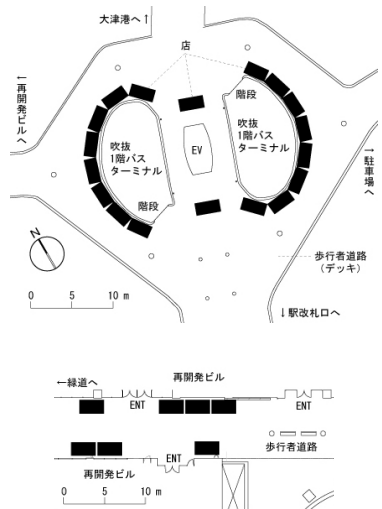


図-2. 会場A(上)、B(下)の店配置

てられた幅3m、奥行2mの空間に、長机、発泡スチロール箱、プラスチックトレイ等を置き、上に商品を並べる。会場Aでは、デッキ中央の吹抜を1周かこむ形で店が並ぶ。会場Bではモール両側の建物外壁に沿って並ぶ。

(2) 調査方法

当定期市会場の来場者を複数の調査員が追跡して観察し行動を記録した。無作為のため、被観察者の中には、定期市が目的でない来場者も含み得る。調査員は、会場平面図

を付した記録用紙とICレコーダ(ピンマイク付)を携帯し、被観察者の来場時刻、属性(性別、年齢層)、同伴者数、退場時刻を用紙に、軌跡を平面図に記録するとともに、停止、移動、発話、対話といった具体的な行動とその対象や内容を、その都度ICレコーダに調査員の音声で吹き込み記録した。行動の対象として、店との距離を把握するために、被観察者の足のつま先と店の最前列の位置関係を、床面舗装のタイル目地(15cm角)で目測し記録した。ICレコーダに吹き込んだ音声による情報は、被観察者ごとに時系列で行為を書き出す形で整理した。

調査は、2006年7月16日(晴れのち雨、調査員5名)、8月19日(晴れ、調査員3名)、9月16日(晴れ、調査員4名)の3回実施した。午前8時から10時までは会場Aのみ、午前10時から11時半までは会場AとB、午前11時半から午後3時(9月は2時)までは会場Bのみを対象に調査を行った。両会場間に距離があること、出店時間帯がずれていることから、観察は各会場で完結させ、両会場を通して追跡することはしなかった。被観察者数は合計で176人、内訳は会場Aで113人、会場Bで63人である。まず、両会場176人の観察結果にもとづき、同伴者、滞在時間、発話の内容と、発話の有無や件数、対話への移行との関係について分析を行った。次に、特徴的な移動軌跡が認められた会場Aの113人について、軌跡の類型化を行い、発話の有無や回数、対話への移行との関係を分析した。さらに、会場Aでの被観察者のうち、発話前後の詳細が記録できた25人分について、データをスコア化し、移動の停止、発話、対話および他者の言動、店との距離等を時系列で詳細に分析した。

4. 結果

(1) 行動観察の結果概要

被観察者176人の属性をみると、男性48人、女性128人と女性が多く、調査員の主観で判断した年齢層では20歳代以下21人、30~40歳代58人、50~60歳代64人、70歳代以上33人と、やや年齢層が高い。1人での来場が94人と過半数、同伴者1人が67人、2以上は15人である。来場時刻と退場時刻の差で滞在時間を求めたところ、161人が算出できた。1分未満が40人もおり、63%が5分未満の一方で、最長は1時間55分である。

発話が認められたのは72人であった。合計で222件の発話があり、1人あたりの発話件数でみると、1件が29人と最も多い(表1)。発話件数の最高は12件、1人あたりの平均は3.1件である。

222件の発話のうち、内容が聞き取れず不明なものを除く191件について、内容別に分類をした(表-2)。発話は全て店員に対するものであり、内容は挨拶、質問、依頼、表明に大きく分けられる。質問が91件、依頼が83件と、換

表-1. 1人が発話した件数

件数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	合計
(人)	29	13	8	2	6	5	5	1	1	0	1	1	72

表-2. 発話の内容別件数

発話の内容		件数	発話内容の具体例
挨拶	8 こんにちは／やあ／あついなあ		
	店について 13件	場所	5 どこから来たんですか？／京都から来てますのん？
時間		2 何時までやってますの？／いつまでしてるんですか？	
取扱商品		6 今日は～ないんですか？／～はもうないの？	
質問 91件	特定の 商品に ついて 78件	正体	13 これは何？／これ、もち？／たけのこのお漬けもん？／これは鮎？
		品質	15 油控えめ？／人工甘味料は入ってない？／どのくらいもつ？
		量	6 これ何グラム入ってるの？／これ100gって何個くらいですか？
		使用法	5 これどう料理すればええの？／これこのままで食べられる？
		価格	17 これいくらですか？／これはなんぼするの？／これ1切れいくら？
		他	22 これ甘い？／どう育てたの？／これ自分で焼いているんですか？
		購入	62 これ下さい／お願いします／それとそれ／すいません
依頼 83件	試食	2 味見していいですか？／試食させてもらえますか？	
	その他	19 一緒に入れてもらったらいい／買い物するから商品置いといて	
	表明	9 いい匂いしますね／おいしい／おいしいです	

挨拶や表明の件数のほぼ10倍である。質問の内容は多岐にわたるが、場所、出店時間、取扱商品といった店に関するものと、正体、品質、量、使用法、価格といった特定の商品に関するものと大別される。依頼には、購入、試食の他、販売員に対する様々な要望があったが、「これ、下さい」のような購入の掛け声の多さ(62件)が顕著である。

購入の依頼はどの店でも認められた。一方、試飲食の依頼は、それが可能な店、商品について質問は、計り売りや詰め放題の店において認められ、店の販売方法に特有の発話もあることがわかった。

また、222件の発話のうち87件(39人)が対話に移行した。対話の継続時間は平均2分30秒、最長34分であった。大半の対話67件が2分に満たない。

(2) 同伴者、滞在時間、発話内容と、発話、対話

1人で来場の場合45.7%の人が発話した一方、同伴者のある場合は35.4%と10%低い。しかし1人当たりの発話件数は3.2件、3.0件とほとんど差がない。対話へ移行した件数で見ると、同伴無しの場合が36.0%に対して、同伴有が44.2%と逆に8%高い。対話の平均継続時間を同伴者の有無でそれぞれ算出すると、同伴者有の方が43秒長い。

滞在時間別に発話および対話の人数を比較したところ、表-3のようになった。5分未満で発話の割合が低い。2分未満の62人に発話は1人もなかった。10分以上になると、ほぼ全員が発話し、滞在時間による差はほとんどない。10分未満では1人当たり約1件の発話しかないが、10分以上では3件以上となる。発話から対話へ移行した人数でも、10分以上で過半数となり25分以上では全員が対話している。1人当たりでも10分以上で件数が多い。

発話内容別に移行した対話の件数を比較すると、挨拶は8件のうち3件(37.5%)、店についての質問は13件のうち6件(46.2%)、商品についての質問は78件のうち48件

表-3. 滞在時間別の発話および対話人数

滞在時間	滞在人数 (人)	発話した人数		1人当たり (件数)	対話した人数		1人当たり (件数)
		(人)	(%)		(人)	(%)	
5分未満	101	16	15.8	1.1	4	25.0	1.0
05～10分未満	15	11	73.3	1.3	4	36.4	1.0
10～15分未満	19	18	94.7	3.6	11	61.1	2.2
15～20分未満	10	9	90.0	4.0	6	66.7	2.0
20～25分未満	7	6	85.7	4.5	4	66.7	3.0
25～30分未満	1	1	100.0	7.0	1	100.0	1.0
30～35分未満	4	4	100.0	7.5	4	100.0	4.3
35～40分未満	1	1	100.0	3.0	1	100.0	1.0
40分以上	3	3	100.0	7.0	3	100.0	3.0

(61.5%)、依頼は83件のうち22件(26.5%)、表明は9件のうち0件であった。

(3) 移動軌跡と、発話、対話

移動の軌跡に4つの特徴的な類型が認められた会場Aの被観察者113人について、軌跡の特徴と、発話の有無や件数、対話への移行との関係を分析した。

図-3に4種類の軌跡の例を示す。左上のように、ある出入口から来場し、どの店に立寄ることもなく会場を通過して、別の出入口から退場した来場者の移動軌跡を通過型とした。右上は、ある出入口から来場し、会場を通過して別の出入口から退場した点では、通過型と同様の軌跡を示すが、店への立ち寄り(図中の黒点)があったため、立寄型として区別した。左下は、店の配置に沿って会場をほぼ1周し、通過型や立寄型と明確に異なる円周状の軌跡を示すため、一巡型とした。来場と退場の出入口は必ずしも同じではない。右下は、あちらこちらの店を対象に移動した不規則な軌跡で、他の3型と明確に異なるため、回遊型とした。こちらも来場と退場の出入口は必ずしも同じではない。一巡型に近い軌跡を示した後、さらに戻る軌跡が派生した場合も回遊型とした。通過型が34人、立寄型が19人、一巡型が26人、回遊型が34人であった。

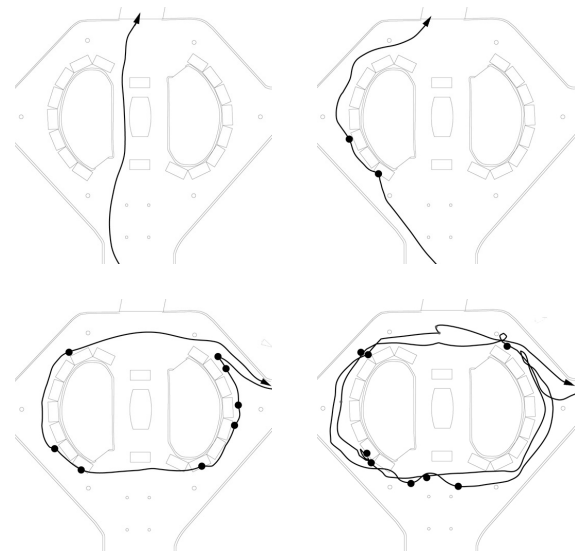


図-3. 軌跡類型 (左上：通過型、右上：立寄型
 左下：一巡型、右下：回遊型)

軌跡類型別に発話の人数を比較したところ、通過型0人、立寄型10人(52.6%)、一巡型19人(73.1%)、回遊型26人(76.5%)と、複雑な軌跡ほど多い。1人当たりの発話件数でもそれぞれ0件、1件、2.7件、4.9件と同様の傾向を示す。対話の人数は、通過型0人、立寄型1人(10.0%)、一巡型15人(78.9%)、回遊型19人(73.1%)であり、ほぼ一巡型と回遊型でのみ対話に移行した。

発話の発生した場所を図示した(図-4)。ほぼ全ての店の前で発話が発生したこと、店に沿った部分に集中して分布していることがわかる。

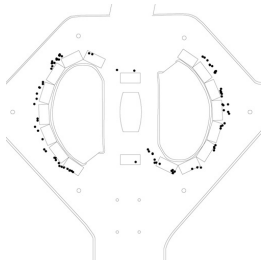


図-4. 発話の場所分布

(4) 発話と対話のプロセス

会場Aでの被観察者のうち25人については、発話直前の被観察者の行動や店との距離、他者からの声かけを、来場から退場まで詳細に記録することができたため、横軸に時間を、縦軸に店との距離をとってスコア化した(図-5)。また25人の調査結果概要を図中の表-4に示した。同伴者の有無、通過型以外の軌跡3類型、滞在時間の長短、発話および対話の多少それぞれの場合が含まれていることを示す。

スコア中に発話は87件ある(▼印)。移動の停止(■印)との関係に着目すると、全ての発話は停止に伴っていたことがわかる。ただし、発話と停止の関係には、発話を起点に停止した場合(23件)と、停止の間に発話した場合(64件)の2通りある。また、対話は41件ある(■印)。No. 8と16のスコアで対話中に移動し店との距離が変わった場合が1件ずつある以外、対話も停止に伴っていた。

発話時の被観察者と店との距離は、発話を伴わない停止と比べて小さいことがスコアからわかる。距離別に発話件数をみると(表-5)、15cmと30cmがほとんどである。

26件の発話については、その直前に、被観察者の行動(●印)や店員からの声かけ(▽印)を観察した(表-6)。行動の主体は、本人の場合が17件、店員の場合が9件であった。また、商品を対象とする行動が22件と大半を占める。本人が主体の場合、典型的な発話例としては、試飲食をして感想を言う、商品を手にとり購買を依頼する、商品を手にとって匂いを嗅ぎ、指差し、見て、質問する、店員と他の客との対話を聞いて、質問する、といった場合がある。店員が主体の場合、品物を勧められて、質問する、購買を依頼する、あるいは、挨拶を受け、質問する、といった場合である。

5. 考察

(1) 定期市における発話と対話の特徴

以上のような結果から、当定期市における発話と対話の特徴について以下のようなことがいえる。

まず、被観察者の発話のうち、ほぼ全てが定期市の店員に対するものであったこと、発話から対話への移行も一定の割合で認められたことから、歩行者道路に、同伴者以外との対話を生じさせる定期市の効果が確認できた。また、会場Aにおいて観察された通過型移動のように、どの店にも立寄らない場合、発話はみられなかった。逆に、発話は店の前での立ち止まりを伴った。つまり、店との接点が生じることで、発話と対話の機会が得られるのである。

発話の直前に観察されたのは、商品を見る、触る、嗅ぐ、味わう、あるいは商品をめぐる店員と他者との対話を聞く、といった視覚、触覚、嗅覚、味覚、聴覚の五感にわたる行動である。このような行動にみられる、商品に対する明確

な関心が、発話のきっかけになると考えられる。このような明確な行動が直前に認められなかった場合、あるいは、店員からの声かけに応じた場合でも、商品に対する関心がきっかけであろう。発話の大半が、店や取扱商品に関する質問と、購入や試食の依頼だからである。さらに、商品に対する関心が質問となり、相手の返答を誘うことが、発話から対話へ移行しやすくなる要因と考えられる。しかし、購入の依頼へ直結する場合は、対話に移行しにくい。

また、全ての店で発話が認められ、発話の場所が会場全体に分布した。全店が対面販売であることがその要因であろう。さらに、ほとんどの発話は店から30cm以内という至近距離で生じた。店員とも1m内外の距離である。商品に触れやすい距離、屋外の喧騒の中、相手の声が聞こえる距離、ということが要因であろう。

(2) さらになるにぎわい創出のための課題

以上のような特徴に関する考察から、対話をさらに創出する余地と課題が浮上する。発話のない来場者が過半数であり、発話から対話への移行も限られている。また、発話の対象は店員に限られ、内容は商品が中心、発生場所は店の至近距離に集中する。移動と店の前での停止が交互に繰り返され、商品の見定めと購入を中心とする行動が展開される。このような行動様式は、むしろ限定的であり、多様化の余地があるといえる。

多様化は2つの方向で考えられる。1つは、来場者の店との接点を増やす方向で、店の販売方法に工夫を加えていくことである。対話が生じやすいように、来場者が質問してみようという気になる方法をとる。例えば、量り売りや詰め放題など、商品内容の詳細を来場者自ら質問しやすくなるような方法が考えられる。

2つ目は仮設空間のデザインによるものである。店の前での、店員を対象とした、購入を前提とする対話を中心である以上、発話から対話への移行は限られ、対話の継続時間も長くないという特徴は不可避であろう。したがって、定期市での購入から派生する行動を受容できる空間のしつらえも検討の余地がある。例えば、購入したものを会場で飲食しながら座ることができる空間などである。

6. 結論

歩行者道路上の定期市における来場者の発話および対話行動の観察をとおして以下の結論を得た。

(1) 来場者176人のうち72人による222件の発話を観察した。発話は全て店員に対し、店や商品に関する質問と購入や試飲食の依頼が大半であった。また、87件の発話が発話から対話へ移行した。大半の対話は2分未満で長く続かない。

(2) 同伴者の有無は、発話や対話の生じやすさにあまり影響しない。会場での滞在時間が10分以上になると発話する場合が増える。商品についての質問が、他の場合に比べて対話に移行しやすい。

(3) より多くの店を巡る複雑な移動軌跡をたどる場合に発話と対話が増す。また、対面型の店の場合、どの店でも

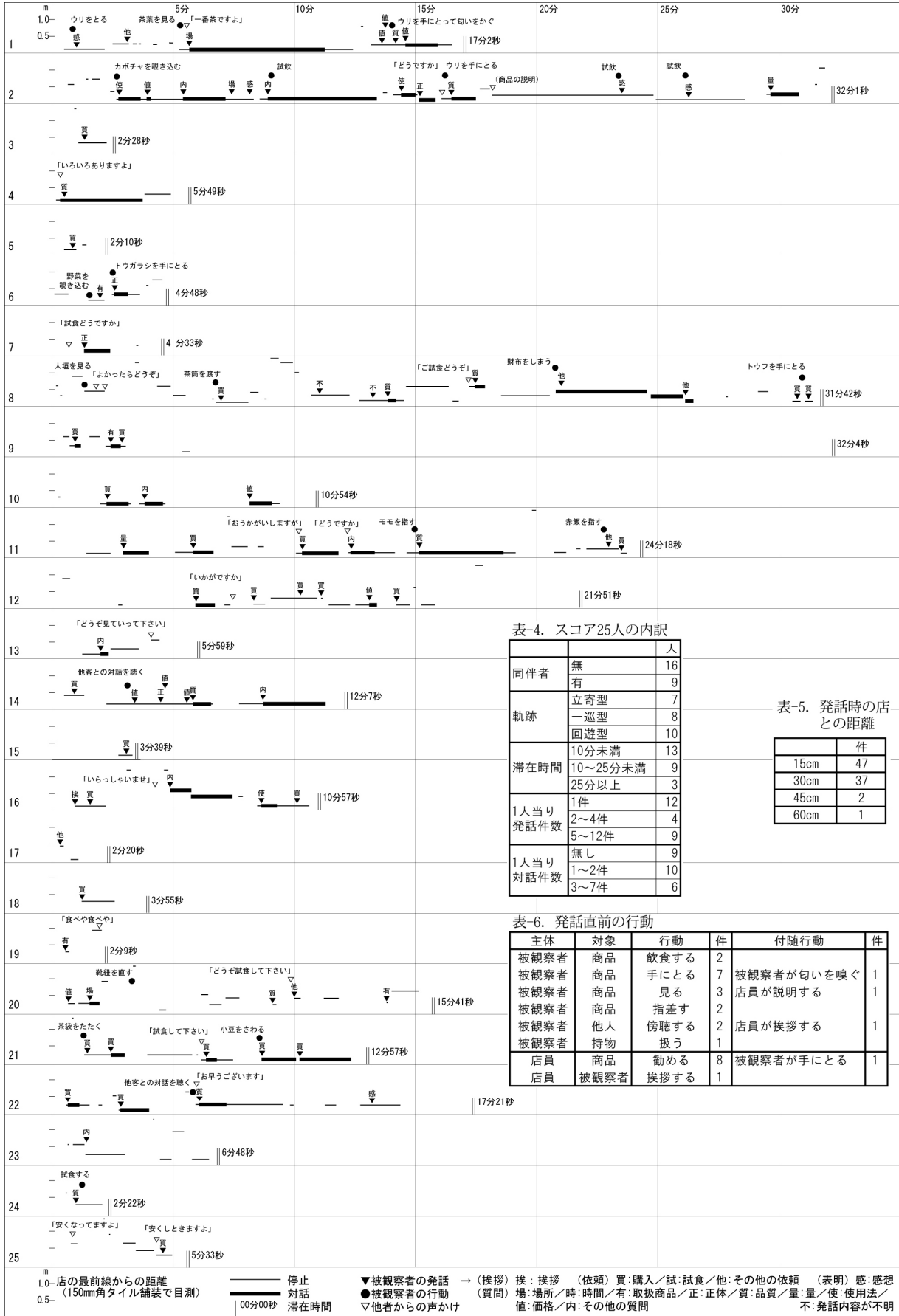


表-4. スコア25人の内訳

同伴者	無	16
	有	9
軌跡	立寄型	7
	一巡型	8
	回遊型	10
滞在時間	10分未満	13
	10~25分未満	9
	25分以上	3
1人当り発話件数	1件	12
	2~4件	4
	5~12件	9
1人当り対話件数	無し	9
	1~2件	10
	3~7件	6

表-5. 発話時の店との距離

距離	件数
15cm	47
30cm	37
45cm	2
60cm	1

表-6. 発話直前の行動

主体	対象	行動	件数	付随行動	件数
被観察者	商品	飲食する	2		
被観察者	商品	手に取る	7	被観察者が匂いを嗅ぐ	1
被観察者	商品	見る	3	店員が説明する	1
被観察者	商品	指差す	2		
被観察者	他人	傍聴する	2	店員が挨拶する	1
被観察者	持物	扱う	1		
店員	商品	勧める	8	被観察者が手に取る	1
店員	被観察者	挨拶する	1		

図-5. 会場Aの来場者25人の行動スコアシート

発話は起こる。

(4) 発話と対話は、店の至近距離での立ち止まりに伴う。商品や店員に対する行動や、店員からの声かけが発話のきっかけとなる場合がある。

(5) 定期市は歩行者道路上において、同伴者以外との対話を生じさせる。しかし、店員を対象に商品をめぐる対話が店の近くで展開するが、長続きはしないという、限定的な事象である。

(6) 対話を増やす販売方法の工夫、購入から派生する行動を受容する仮設空間のデザインという2方向の課題が考えられる。

7. 今後の課題

調査手法の確立が今後の課題である。今回の調査では、各調査員の記録精度が微妙に異なり、発話直前の行動や他者の言動の記録にばらつきが生じ、分析が限られてしまった。また、来場者の行動は予測不可能なため、被観察者以外で注目すべき行動をとったとしてもデータを収集できない場合が生じた。

本研究の先にある課題も明らかとなった。まず、発話対話に限定せず、来場者の様々な行動の関係を分析し、より総合的な視点でにぎわいをとらえることである。また、普段の空間に対する定期市の波及効果を計測することも課題である。1ヶ月のうち1日だけ、にぎわいを創出することが、普段の利用者や付近の住民に、いかなる影響や効果を発しているのか。定期市会場としてのイメージは定着しているのか。定期市に端を発する利用が生じているのか。さらに、より実践的な実験による定期市のデザイン研究という課題の方向も見えてきた。例えば、ある予想のもとに店舗配置、商品レイアウト、販売方法を試み、本研究で用いた来場者行動の軌跡図とスコアシートの組合せで検証を行う、といったことが考えられる。

<謝辞>

末富孝也氏、浅野智子氏をはじめ、浜大津こだわり朝市運営委員会のメンバーの方々、出店者の方々には、本調査の実施にあたり様々な便宜をはかっていただいた。この場をお借りしてお礼を申し上げたい。

【補注】

- (1) 例えば国土交通省住宅局は、2007年度の政策として、中心市街地再生策の中で、にぎわい空間施設整備やにぎわい創出力強化を挙げている。国土交通省住宅局ホームページ、<http://www.mlit.go.jp/jutakukentiku/house/torikumi/19yosangaiyou/19yosangaisanyokyugaiyo.pdf>, 2007年3月28日閲覧。
- (2) 本研究では、他者に対して何らかの意図をもって声をかけることを発話とし、最初の発話に対する返答からさらに発話のやりとりが続くことを対話と定義する。
- (3) 例えば、愛知県日進市の日進野菜研究会が主催する朝市では、旧住民(生産者)と新住民(消費者)とのコミュニケーションが促進され、食材の調理法伝授から万事の相談にまで交流が深まっているという。農業と経済12月号(1998年)、農業と経済社、pp.86-93
- (4) 2005年までは「浜大津こだわり朝市」として食材のみ扱っていたが、2006年に手しごと品も扱うようになり、現在の名称となった。
- (5) 明日都浜大津と呼ばれている再開発ビル。大津市により1983年に策定された市街地再開発基本計画にもとづき、1998年に竣工した住宅および商業施設。2003年に主要テナントが撤退した後、2006年に子育て支援センターや市民活動センターが入った。全国市町村再開発連絡協議会ホームページ(2002年)、第19回再開発塾概要、<http://www.saikaihatsu.gr.jp/juku19.html>, 2007年3月28日閲覧。

【参考文献】

- 1) 山田忠雄他編(2005年)、新明解国語辞典 第六版:三省堂:p.1125
- 2) 前掲書1), p.1124
- 3) 今井拓也, 小林茂雄, 大野隆造(1999年)、「都市の公共空間における滞在者の分布が着座場所選択に及ぼす影響」, 日本建築学会大会学術講演梗概集D, pp.765-766
- 4) 坂井猛, 萩島哲, 有馬隆文他(2001年)、「時刻レイヤーによる交流・滞留と空間構成に関する研究(その1~3)」, 日本建築学会大会学術講演梗概集F-1, pp.283-288
- 5) 篠崎高志(2002年)、「都市の屋外公共空間における滞留行動に対する人的要素の影響に関する研究」, ランドスケープ研究, 65(5), pp.701-706
- 6) 樋口節夫(1977年)、定期市, 学生社, pp.105-109
- 7) 折田仁典, 加藤裕康, 湯沢昭(1995年)、「DEMATEL法による定期市問題の構造化に関する研究」, 第30回日本都市計画学会学術研究論文集, pp.505-510
- 8) 朝倉真一, 野嶋政和(1998年)、「北野天満宮定期市における仮設的空間とその成立基盤となる空間に関する研究」, 第33回日本都市計画学会学術研究論文集, pp.235-240